▶「家庭用品等に係る小児の誤飲事故に関する報告」(厚生労働省)
http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/03/h0330-4e.html#top
▶(財)日本中毒情報センター　田村満代「乳幼児の誤飲事故の実態」(東京都生活文化局『くらしの安全情報』Vol.38)
http://www.anzen.metro.tokyo.jp/pdf/anzenjyoho_v38_1.pdf
▶「あなたの子ども 不慮の事故で 泣かせていませんか ー過去10年間の救急事故と火災のデータが語る 事故の傾向と対処法ー」((財)東京連合防火協会発行)
http://www.tfd.metro.tokyo.jp/inf/h21/04/kodomo.pdf

● 事例4：溺水 ●

溺死の死亡率を外国と比べると、わが国の1～4歳の溺死率は、低い国の7倍以上となっている。特に1歳の溺死率が高く、0歳と1歳の溺死の8割は浴槽での事故である。また、浴室では滑って転倒する事故や、熱湯を浴びるやけども起きている。
▶「どう防ぐ 子どもの事故(溺水1)」(子供の安全ネットワークジャパン)
http://safekids.ne.jp/childaccidentreport/report13.html

● 事例5：はさまれ ●

ベビーカーに関わる事故として、PIO-NETの危害情報システムには1998年度から2003年11月末日までに転落・転倒などの事例が311件寄せられている。対策で挙げた注意の他にも、商品テストの結果、段差のある周回路を50km連続走行したとき、車輪の取付け角度の変形などを生じたものがあった。
▶「ベビーカーの安全性」((独)国民生活センター)
http://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20040407_1.html

高齢者編

年齢が上がるにつれ、家庭内事故が増加

高齢になると、心身の機能や感覚が衰えて危険から身を守る動作がとりにくくなっていく。また、外出の機会も減り、家ですごす時間が長くなって、年齢が上がるにつれ家庭内での事故の割合が高くなる傾向がみられる。事故は、家の中を普通に歩いていたときや、台所での調理中、入浴中など、日常生活の中で発生しているが、高齢者は事故へとつながる心身の機能の低下を自覚しない傾向が見られるため、加齢にともなうからだの機能や感覚の衰えを意識し、適度な運動やバランスのよい食事、趣味を楽しむなど、健康でいるための工夫を続けることが大切。また、事故を未然に防ぐ上で、安全性の高い製品選びや正しい使い方を身につけることが必要である。
▶「病院危害情報からみた高齢者の家庭内事故」((独)国民生活センター)
http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20080904_3.pdf
▶「高齢者の事故防止マニュアル」(東京都生活文化局消費生活部)
http://www.anzen.metro.tokyo.jp/f_senior.html

● 事例1：衣類への着火 ●

総務省消防庁によると、何らかの火源により身につけている衣類に着火した火災(着衣着火)による死者の70%以上は65歳以上の高齢者である。加齢とともに身体機能が衰え、火を使うときの注意力が低下し、火災に気づいてから避難するまでに時間がかかるなど、生命の危険が高まる。高齢者が調理する際、ガスストーブなど暖房機器を使用する際などは、特に注意が必要である。国民生活センターの調査・実験では、「防炎製品ラベル」がついた製品((財)日本防炎協会が自主採用)は、一般製品に比べ防炎性能が優れていることが確認されている。エプロンやアームカバー、カーディガン、パジャマなどがあるが、取扱店舗が少なく平均購入価格は一般製品の約5倍。なお、「防炎」は「不燃」とは異なり、あくまでも「燃えにくい」という性能を示す用語である。
▶「危険!着衣着火に注意 未然防止には防炎製品が効果的」((独)国民生活センター)
http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20081204_1.pdf

● 事例2：ハンドル形電動車いす ●

「ハンドル形電動車いす」は、2007年5月以降消費生活用製品安全法に基づく重大事故として35件が報告されていることから、消費者庁は2010年9月、使用に関する注意喚起を行った。その被害者の7割以上は、70歳以上の高齢者である。消費者庁は2010年9月、使用に関する注意喚起を行った。運転免許がいらないため、高齢者の外出手段として利用者が増加している一方、道路端を走行中に道路の外へ転落したり、下り坂でのスピードの出しすぎ、踏み切りでの脱輪などによる転倒が多発している。運転講習会に参加したり、取扱説明書をよく読むなどして、正しい操作方法を知り運転に慣れることが必要。また、歩道を走行するため、他の歩行者への配慮も欠かせない。
▶「電動車いす(ハンドル形)の使用に関する注意喚起について」(消費者庁)
http://www.caa.go.jp/safety/pdf/100908kouhyou_3.pdf
▶NITE製品安全動画:路肩走行中の転倒
http://www.nite.go.jp/jiko/poster/swf/0331.swf

● 事例3：シルバーカー(歩行補助車) ●

2004年～2008年の5年間で、シルバーカーによる事故は30件報告されている。使用者には女性が多く、事故事例もほとんど女性である。シルバーカーは、自立して歩ける高齢者が外出する際に歩行の補助、および品物の運搬、休息のために使用することを目的に作られている。なお、(財)製品安全協会では、シルバーカーの正常な使用の範囲内で傷害を最小限にすることを目的とした安全性品質および表示・取扱説明書に関するSGマーク認定基準を設置しており、合格した製品にはSGマークが表示されている。
▶「歩行補助車(シルバーカー)の安全性」((独)国民生活センター)
http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20090514_1.pdf
▶「シルバーカーの認定基準及び基準確認方法」((財)製品安全協会)
http://www.sg-mark.org/KIJUN/S0075-02.pdf

● 事例4：介護ベッド ●

2007年5月、消費生活用製品安全法の重大製品事故報告・公表制度が施行されて以降、2010年9月までに介護ベッド用手すりやサイドレールのすき間などに頭や首、手足などが挟まれた事故は37件(死亡15件・重傷22件)発生しており、消費者庁は消費者への情報提供と注意喚起を行った。事故を未然に防ぐためには、手すりやサイドレールがしっかり取り付けられているか、取り付け位置は適切か、などを常時確認する。認知症の高齢者や片マヒなどの障がいがある人は特に注意が必要。また、夜から朝の時間帯にはトイレに行こうとしてベッドからの転落や移動中の転倒事故が多発しやすい。
▶「介護ベッド用手すりのすき間に頭や首、手足などを挟む事故に係わる注意喚起について」(消費者庁)
http://www.caa.go.jp/safety/pdf/101001kouhyou_2.pdf

＜福祉用具のJIS規格について＞

福祉用具については、高齢化社会の進展に伴う需要の増加によって、製品事故の増加が見られる。このため、国民生活の安全・安心の確保等の観点から、「手動車いす」、「電動車いす」及び「在宅用電動介護用ベッド」の3つの福祉用具に関して、JISマーク(福祉用具と判るJISマーク)の表示を2008年5月からスタートした。
▶「福祉用具分野に係るJISマーク表示の開始について」(経済産業省)
http://www.meti.go.jp/press/20080527008/20080527008.pdf

「リスクの学習帖」講座のための手引書

円滑なリスクコミュニケーションの推進に向けて

「消費者基本計画」(平成22年3月30日閣議決定)において、消費者の安全・安心の確保のため、消費者庁は、迅速・的確な事故情報の収集やそれに基づく消費者に対する普及啓発や情報提供に取り組むとともに、円滑なリスクコミュニケーションの推進にも重点的に取り組むこととされています。
本資料は、こうした消費者への安全啓発に関わる取組みに役立つものとして、最近の要注意事例を収集し、それらに基づきながら、注意喚起を要すると考えられる事故例などを取り上げております。
私たちの身の回りに存在する食品・製品・サービスに係るリスクについて認知し、リスク低減に関する理解を促進するため、特に、消費生活を本格的に営み始める前の若年層に対して重点的に広く配布・提供し、円滑なリスクコミュニケーションの推進を図る上でご活用いただければと思います。

消費者庁　消費者安全課

資料(リスクの学習帖)・手引書を活用した講座を進めるにあたって

「リスクコミュニケーション」の普及にあたり、その第一歩として「リスクについて考えよう」ということを目的に資料の作成をいたしました。消費者にとってはなじみの少ない「リスク」という言葉ですが、この「リスク」を「100%の安全は不可能」という前提のもとに、参加者に理解、共有してもらおうというものです。
資料は若者、幼児、高齢者という年代ごとに事例とその考え方等を中心に展開しています。
そしてこの手引書については、「生活シーン」とそれぞれの年代の特徴的事例をピックアップし、「講座」という限られた時間の中で、「リスク」を幅広く理解してもらうためのカリキュラムと関連情報を提供いたしました。
なおカリキュラム作成にあたって、早稲田大学理工学術院・小松原明哲教授よりアドバイスをいただきました。
ご活用いただければ幸いです。

社団法人 日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会
消費者安全啓発特別委員会

目次

1. 資料を利用した講座カリキュラム
　カリキュラムA(生徒用) …… 2ページ
　カリキュラムB(消費者用) …… 4ページ
2. 資料の関連情報 …… 6ページ
3. 【付録】ワーク材料

リスクコミュニケーションとは

リスクコミュニケーションとは、リスクの専門家から情報が一方的に伝えられることではなく、多くの個人や団体がリスクについて疑問や意見を述べあい、情報を交換し相互に働きかけあいながら、ともに意思決定に参加するということである。
ここで扱うリスクコミュニケーション講座は、講師が製品やサービスの安全に関するリスクについて教えたり、リスクを低減する対処方法を教えたりするだけでなく、日常生活の中で人々が漠然と感じている不安や予見できない危害などリスクの本質を知り、情報を共有しあうことで、自ら判断・行動し、建設的な意見を述べる「自立した消費者」になることを目的としている。

カリキュラムA **生徒用** | **ヒヤリハットをさがせ!**

高校生対象の講座を想定したとき、まだ生活経験の少ない生徒では、
日常生活全般から危険を想像することは難しいといえます。
そこで自分の行動範囲の中から危険な状況を探し出し、リスク軽減について考えていきましょう。

●想定対象●

対象：高校生の授業（家庭科、総合学習でも可）
　　一クラス　約40名、一班4～5名のグループをつくる
時間：50分（1時限）
場所：教室

●講座のねらい●

自分の身の回りから危険な状況を探しだし、その危険を避けるためにはどうすればよいのか考える。
安全で安心して暮らすために、リスクを低減する感性を身につける。

●カリキュラム・タイムスケジュール●

時間	内容	ねらい	概要（進行上の配慮事項）	準備物・備考
導入 3分	1.挨拶 2.今日のテーマ・内容	プログラム・目的説明	リスクとは…考え方を説明。 問題提起:安全で安心に暮らすためにどうすればよいか。	資料
グループワーク「ヒヤリハットを探せ!」				
展開1 10分	1.ワークの説明	リスクを具体的に イメージできるようにする。	自分の体験から、トラブルにつながる言葉を多く引き出せるように工夫する。	生活シーンの絵 書き込みシート 水性マーカー等
	2.ワーク	身の回りのリスクを探す 感性を磨く。	1.生活シーンの絵から、各人が身近に起こりうる「ヒヤリハット」を探し、 書き込みシートに概要を書き込む。 2.班内で一人ずつ書き込みシートを見せながら情報を共有する。 3.班で全体発表する内容を1つに絞る。発表者を決めておく。	
グループワーク発表と解説				
展開2 15分	1.発表（各班1名）	情報を共有する。	発表者は書き込みシートに基づき「ヒヤリハット情報」を説明 発表者の書き込みシートを回収、黒板に貼る。	
	2.解説	リスク低減の感性を身につける	各グループから発表された内容を整理し、感想を述べる。	
ミニ講座				
展開3 15分	1.知っておきたい事故・危険	身近な事故事例と、どうして 事故が起こってしまったのか、 背景や被害者の行動について 考えてみよう。 また、どのようにしたら 防ぐことができたのかに ついても考えてみよう。 自分の身にも起こりうるリスクで あることに気付く。	資料を使用して、若者が遭遇しやすい事例を紹介	資料、小道具
	2.事例・解説		適宜、写真、実物などを使用し、目に見える形での説明も可。	
	3.リスク低減のための行動		リスクを減らす＝安全な生活のために何が必要かを伝える 最後に「以前と違う状況を見つけたら、 そのままにしないで次の行動につなげてほしい!」とまとめる。	
振り返り&分かち合い				
まとめ 7分	1.振り返りシート記入	全体を通して、何を学んだのか 確認する。リスクについて コミュニケーションする 必要性に気付く。	各自、振り返りシートに記入してもらう。	振り返り& アンケートシート
	2.発表		項目ごとに受講者を指名し、発表してもらう。	
	3.総括 今日の一言!		今日の話を周りに伝えてほしい。 リスクコミュニケーションによって、類似のリスク低減に役立つことに気付く。	

＜資料やワーク材料の活用方法、留意点＞

(1)準備するもの

使用時	項目	大きさ	数	備考
グループワーク	生活シーンの絵 書き込みシート	A3 A4	班に1枚 全員	拡大コピーして各班に1枚ずつ配布 一人数枚配布
ミニ講座	資料		全員	必要なら、事例説明のための小道具
まとめ	振り返り&アンケート	A4	全員	一人1枚配布

(2)ワーク材料の使い方

手引書の【付録】は、ワークを進める際、適宜、コピーしてご利用ください。

＜生活シーンの絵＞

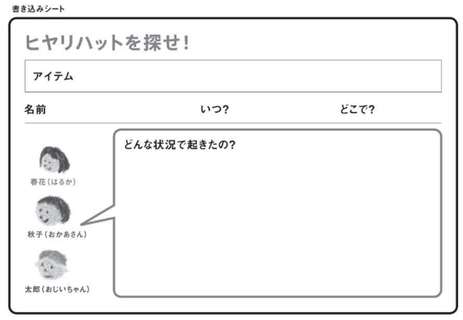
【付録】の生活シーンの各部屋・空間には、いろいろな製品（アイテム）が描かれています。
この絵を使い想像を膨らませて、身近に起こりうる「ヒヤリハット」を探します。
普段は安全と思っていても、その状況によって、リスクは違ってくることに気付かせます。

＜書き込みシート＞

【付録】の書き込みシートをコピーし、一人数枚ずつ配ります。
そこに生活シーンの絵から探しだした「ヒヤリハット」を書き込ませます。

▶ **引き出したいこと**

・トラブルにつながる「ヒヤリハット」した状態を具体的に書く。
・各グループを回りながら、リスクをイメージできるように、
　アドバイスする。



＜ミニ講座＞

グループワークで探した「ヒヤリハット（身近な事故・危険）」を
さらに資料・手引書の関連情報で深め、自分の身にも起こりうるリスクであることに気付かせます。
最後に、資料P.10～11を確認しながら、リスクを減らす＝安全な生活のために、どうすればよいか、
何ができるかを伝えましょう。

＜振り返り&アンケート＞

下記項目を盛り込んだ「振り返り&アンケート」シートを作成し、各自1枚ずつ配ります。
リスク低減のために何ができるか、指名発表してもらい情報を共有します。
この振り返り&アンケートシートは回収し、この講座の目的達成の評価に活用しましょう。

▶ 振り返りシートの例示

・今日の作業を通して、あなたが一番印象に残ったことは?
・今日の作業を通して、あなたが一番反省したことは?
・普段の生活に活かせると思ったことは?
・あなたは、どのような「次の行動」を起こしますか?